

ヴェールト「皇帝カール」考

高木 文夫

Kaiser Karl

Herr Kaiser Karl, der fromme Mann,
Ließ viele Menschen zu Tode schlahn;
Er schlug sie tot um das Christentum:
Das brachte ihm ungeheuren Ruhm.

Und saß zu Aachen in seiner Pracht,
Im Wams aus Otternfell gemacht;
Und alle Völker nah und fern,
Die beugten sich dem gewalt'gen Herrn

Und brachten Geschenke aus aller Welt,
Viel Gold und Seiden und Gezelt;
Ihm bracht der Kalif aus Morgenland
Eine Uhr und einen Elefant.

Doch Kaiser Karl, der fromme Held,
Er sprach: „Was nutzt mir Gold und Geld,
Was soll der fremde Elefant? —
Hab schönre Dinge im eignen Land!“

Und zog hinauf den grünen Rhein,
Und pflanzte die Rebe zu Ingelheim;
Und pflegte sie mit derselben Hand,
Die hundert Völker überwand,

Ja pflegte sie mit der blutroten Hand,
Die hundert Völker überwand —
Und dies ist der Grund, daß zu Ingelheim
Noch heute wächst der blutrote Wein.

皇帝カール

皇帝カール氏、この敬虔な男は
多くの人々を死に至らしめ
キリスト教のために大勢を殴り殺し
それがために莫大な栄誉を得た

そして川瀬^{かわうそ}の毛皮で出来た胴着を着て
アーヘンで壮麗に座した
そして遠く近くの諸国民はみな
この強大な君主にひれ伏した

そして世界中から贈り物をもたらした
たくさん^{たくさん}の黄金や絹や天蓋を
オリエントのカリフが持ってきたのは
時計と象だった。

だが、皇帝カール、この敬虔な英雄は語った
「黄金や金銭が朕の何に役に立つ
異国の象でどうしようと言うのだ —
自国にもっとすばらしいものがあるのに。」

そしてみどりなすライン河^{さかのぼ}を遡り
そしてインゲルハイムに葡萄を植えた
そして百の国の民衆を打ち負かした
その同じ手で葡萄を手入れしたのだ

そうだとも百の国の民衆を打ち負かした
血染めの赤い手で葡萄を手入れした —
そしてこれがインゲルハイムに今日でも
血のように赤いワインができる理由だ

このヴェールト Georg Weerth (1822-1856) による詩「皇帝カール Kaiser Karl」はドイツにおける三月革命の最中『新ライン新聞 *Neue Rheinische Zeitung*』第2号(1848年6月2日付け)に掲載された。掲載された場所は一面

最下段の文芸欄（「罫線下 Unter dem Strich」）左端である。¹⁾ 但し、この詩には右の資料に見られるように、表題に「おかしな皇帝たち *Die komischen Kaiser*」（傍点筆者）とあり、さらに「皇帝カール」の前に 1. という数字が打たれている。このことからこの詩の『新ライン新聞』掲載にあたり、皇帝たちを扱った同種の詩を引き続き掲載しようとしていたことが分かる。しかし、この企ては少なくとも『新ライン新聞』紙上実現することはなかったし、この詩の「皇帝カール」とはカール大帝（764-814）のことであるが、彼以外にどの皇帝を取り上げようとしたのかも定かではない。この点を理解する一つの鍵がこの詩がヴェールト自身が後に出版する

Die komischen Kaiser.

Von Georg Weerth.

1. Kaiser Karl.

**Herr Kaiser Karl, der fromme Mann,
Ließ viele Menschen zu Tode schlah'n;
Er schlug sie todt um das Christenthum:
Das brachte ihm ungeheuren Ruhm.**

**Und saß zu Nachen in seiner Pracht,
Im Wanims aus Stiernfell gemacht;
Und alle Völker nah und fern
Die beugten sich dem gewaltigen Herrn.**

**Und brachten Geschenke aus aller Welt,
Viel Gold und Seiden und Gegetz;
Ihm bracht der Kalif aus Morgenland
Eine Uhr und einen Elephant.**

**Doch Kaiser Karl, der fromme Held,
Er sprach: Was nugt mir Gold und Geld,
Was soll der fremde Elephant? — —
Hab' schönere Dinge im eignen Land!**

**Und zog hinauf den grünen Rhein
Und pflanzte die Rebe zu Angelheim;
Und pflegte sie mit derselben Hand
Die hundert Völker überwand.**

**Ja pflegte sie mit der blutrothen Hand
Die hundert Völker überwand —
Und dies ist der Grund, daß zu Angelheim
Noch heute wächst der blutrothe Wein.**

資料：『新ライン新聞』第2号第一面最下段掲載の「皇帝カール」（このすぐ右に「窮地のブライス氏」が掲載されている）²⁾

- 1) 同じ号に、そしてこの詩のすぐ右と次頁最下段に、再開された、同じヴェールトの散文『ドイツ商業生活のユーモラスなスケッチ *Humoristische Skizzen aus dem deutschen Handelsleben*』の一章「窮地のブライス氏 *Der Herr Preiß in Nöthen*」の続編が掲載されている。ついでに言えば、この『ドイツ商業生活のユーモラスなスケッチ』は奇妙な構成による散文である。この散文は三月革命勃発前の1847年11月から翌1848年2月にかけてその第1章から第4章までが『ケルン新聞 *Kölnische Zeitung*』に断続的に連載されていた。すでにその続きも書き上がっていたようであるが、結局『ケルン新聞』にも『新ライン新聞』にも掲載されることなく、原稿のまま保存され、約100年後の第二次世界大戦終了後にこの部分は初めて印刷されることになった（Vgl. Georg Weerth: *Humoristische Skizzen aus dem deutschen Handelsleben*. Hrsg. v. Bruno Kaiser. Verlag Volk und Welt. Berlin. 1949）。しかし、1848年2月にパリで、続いて同年3月にドイツ各地で革命が起こり、ケルンで『新ライン新聞』が発刊されると編集部に入り、文芸欄の責任編集者となったヴェールトの作品が次々と同紙に掲載された。本稿の対象である詩「皇帝カール」も掲載され、『ドイツ商業生活のユーモラスなスケッチ』も登場人物を代えずに、同紙創刊号（1848年6月1日付け）から革命の一連のできごとに呼応するような内容で連載された。
- 2) *Neue Rheinische Zeitung*. Verlag Detlev Auvermann KG. Glashütten im Taunus, 1973 S. 5. 以下同紙からの引用は（NRhZ/5）のように記す。

つもりでまとめ直した草稿を元にしたレクラム文庫版の詩集³⁾では詩の分類がカイザー版全集第1巻⁴⁾とは異なっており、そこでは「II記憶 *Erinnerungen*」のさらに下位分類「歴史上のこと *Historisches*」に収められている。この「歴史上のこと」には「皇帝カール」は「おかしな皇帝たち *Die komischen Kaiser*. 1. 皇帝カール *Kaiser Karl*」と題され、他の三編、「2. ルター *Luther*」, 「3. ティリー *Tilly*」および「4. ハンザ同盟 *Die Hansa*」とともに収められていて⁵⁾、いずれの詩も歴史上の人物や同盟をテーマとしていることでこの詩の解釈に一つの視点を与えている。

レクラム版およびカイザー版で共通している上記三編のそれぞれについて見てみよう。「ルター」ではヴァルトブルクに潜み、新約聖書の翻訳に勤むマルティン・ルター *Martin Luther* (1483-1546) の姿が描かれている。その翻訳は「天の愛する神は／喜んだが／悪魔には地獄のようで」あり、悪魔の「すべての楽しみが消えよう」(第3連, Reclam/47, SW I/114)⁶⁾としていた。悪魔はルターを妨害しようとするが、ルターは悪魔と対決し、「大きなインク壺」を投げつけ、相手を退散させる。新時代を切り開くルターの勝利である。続く「ティリー」では三十年戦争でのカトリック側の将軍ティリー伯爵 *Johann T'Serclaes Graf von Tilly* (1559-1632) が主役に据えられている。彼はプロテスタント側のスウェーデン王グスタフ・アドルフ *Gustav II Adolf* (1594-1632) に敗れるが、その様子が細かく描かれる。ティリーは詩の中で「老いた悪魔ティリー」(第5連, Reclam/48, SW I/116, 傍点筆者)と言い表されるが、この「悪魔」が「ルター」に出てくる「悪魔」と微妙に響き合っている。さらにティリーは「生まれてから／ワインを飲んだことも女性に接吻したこともない」いわば朴念仁で、「^{つわもの}戦闘にも負けたことがない」(第6連, Reclam/49, SW I/117) 強者であるが、グスタフ・アドルフにかかっては敗退せざるを得なくなる。続く「ハンザ同盟」ではテーマが変えられて

-
- 3) Georg Weerth: *Gedichte*. Hrsg. v. Winfried Hartkopf unter Mitarbeit von Bernd Füllner u. Ulrich Bossier. Reclam. Stuttgart. 1976. RUB 9807. (以下「レクラム文庫版」)
- 4) Georg Weerth: *Sämtliche Werke in fünf Bänden*. Hrsg. v. Bruno Kaiser. Aufbau-Verlag. Berlin. 1956. (以下「カイザー版全集」) Band 1 からの引用は (SW I/114) のように記す。
- 5) レクラム文庫版の編者はこれらの各編は1843年12月のイングランド移住以前に成立したと推測している (Vgl. *a. a. O.* S. 143)。カイザー版全集では「皇帝カール」の前に「キンペリ族とチュートン人 *Die Cimbern und Teutonen*」, 末尾に「エンツィオ王 *König Enzo*」を加えて、「歴史上のこと *Historisches*」の表題の元に配列している (Vgl. SW I/113f)。ちなみにこれら関わりがあると思われる四編+二編のうち生前に印刷されたのは *Kaiser Karl* のみである。
- 6) 以下においては、レクラム文庫版からの引用は (Reclam/47) のように記す。

いるように見えるが、描かれた栄華を極めたハンザ同盟の衰退してゆく様子は敗北し退却する悪魔やティリー将軍の姿と繋がっている。「過ぎ去った、過ぎ去った、マストは沈み／船という船は／すっかり壊れた／ハンザ同盟の僅かな船板が行く」(第5連, Reclam/50, SW I/118)。全盛期を考えれば、これは無残な光景である。これらの三編を見てみると気づくのはいわば「滅び行くものへの挽歌」と言ったことであろう。「皇帝カール」では世に並ぶものがないおよそ千年前の栄華が強調されている。しかし、千年後を知る作者にとってはその末路は「盛者必衰のことわり」の通り自明のことである。

*

次に指摘されるべきことはアーヘン⁷⁾という町である。カール大帝は「敬虔なるキリスト教徒」としてその権力を行使し、そのため多くの人々が殺されることになる。詩人のそれまでの言説によって、すでにここに詩人による、権力批判、そしてキリスト教批判を読み取ることができよう。カール大帝の権力は絶大で、「諸国民はひれ伏し」、「世界中から」贈り物を贈られる。それが何の役に立つか、カール大帝は訝しみ、その空しさにすでに気付いている。アーヘンはそんな大帝の愛した土地で、墓もそこにある。しかし、中世ヨーロッパにおいて皇帝の居所がすぐに帝国の首都となるわけではない。そもそもこの時代帝国の首都というのは現代の意味とはかなり異なっている。皇帝は一カ所に留まっていたのではなく、領地内を定期的に巡回していた。その中でアーヘンは特にカール大帝に好まれた土地だったのだ。

アーヘンという町について、ヴェルトはこの抒情詩掲載の後、同じ『新ライン新聞』に連載していた『著名なる騎士シュナップハンスキーの生涯と行い *Leben und That des berühmten Ritters Schnapphahnskis*』⁸⁾の同紙第95号

-
- 7) カール大帝とアーヘンの関わりについては佐藤彰一『カール大帝 ヨーロッパの父』(世界史リブレット029) 山川出版社、2013年および Schneidmüller, Bernd: *Die Kaiser des Mittelalters. Von Karl dem Großen bis Maximilian I.* Becksche Reihe. 2. verbesserte Auflage. Verlag C. H. Beck. München. 2007 を参照。
- 8) 「ドイツ文学最初の新聞連載小説」(B. Kaiser) とされる、ヴェルトの代表的な作品『著名なる騎士シュナップハンスキーの生涯と行い』は当初『新ライン新聞』の第69号(1848年8月8日付け)から第167号(1848年12月13日付け)まで断続的に連載され、同じ1848年8月初め一度冊子版第1分冊(23頁、著者名の記載なし)がフランクフルト・アム・マインで出版された(Vgl. Bernd Füllner: *Georg-Weerth-Chronik. Veröffentlichungen der Literaturkommission für Westfalen.* Aisthesis Verlag. Bielefeld. 2006. S. 96) 新聞での連載完結後この小説は翌1849年8月ハンブルクのホフマン・ウント・カンペから新聞連載版の他、同じ『新ライン新聞』に連載された「1848年の大聖堂祭典 *Das Domfest von 1848*」(1848年8月18日~31日まで5回分載)と新聞未掲載部分とを

(1848年9月6日付) 掲載部分の末尾で

「次に彼 (= シュナツプハーンスキー) を見るのはアーヘンにおいてである。物思いに沈んで彼はカール大帝の墓前に座り、興じていた、ルーレットに。」(NRhZ/479, SW IV/360)

と綴っている。いくら遊び人とはいえ、主人公シュナツプハーンスキーはこともあろうにカール大帝の墓前で賭け事に興じていたのである。シュナツプハーンスキーのことは別稿に譲るとして、この後に続く一節でヴェールトがこの時点でアーヘンをどう見ていたかがうかがえる。

「ついでに言うと、アーヘンは今日に至るまで知られることが極めて少ない町だった。少し前になってようやく、ハインリヒ・ハイネによって発見され、功績に応じて歌われた。アーヘンの美しさはハイネによってようやく正しく光を当てられた。それ以前はほとんど知られていなかった。」(NRhZ/513, SW IV/361)

「ハイネによって」と言うのは、ハイネの叙事詩『ドイツ冬物語 *Deutschland. Ein Wintermärchen*』(1844年)でアーヘンが舞台の一つになったことを述べている。まるでアーヘンが忘却されてでもいたかのようなヴェールトの口ぶりだが、この後に続く一節を読めば、そうでも無いことが分かる。ではそれまでアーヘンについてどう知られていたかだが、

「神聖なカール大帝がそこで亡くなり、埋葬されていること、周辺の農民たちが七年ごとに聖肌着の展示へと巡礼し、ボンの大学生たちが毎日曜日大広間の自然な緑色のテーブルに巡礼した——……これまでの間アーヘンの子供でも知っていることのすべてがこれだ。」(NRhZ/513, SW IV/361)

しかし、「今はどうだろう。」と作者は続ける。「路上の代理人は誰にも知られているし、郵便局に掲げられている驚も知られている。犬たち、哀れな退屈な犬たちがアーヘンで何に取りかかっているかは正しく知られている。よろしい。ほんのちっぽけなことだって知られている。」と言って、さらに

合わせ編集し直されて出版された(273頁、著者名記載)。従って新聞連載版と刊行本版とでは異同がある。また、新聞連載版には刊行本版に見られるような章分けと各章の表題はない。上記の「次に彼 (= シュナツプハーンスキー) を見るのはアーヘンにおいてである。物思いに沈んで彼はカール大帝の墓前に座り、興じていた、ルーレットに」の箇所は新聞では第95号掲載部分の末尾であるが、刊行本版では、この部分と次の第103号連載部分の間に「VI C 公爵 *Herzog C.*」が挟まれたため、第95号掲載部分に当たる「V ブリュッセル *Brüssel*」ではなく、「VI C 公爵」の末尾に移されている。また、作中でヨーロッパ各地を放浪するシュナツプハーンスキーについては拙稿「旅するシュナツプハーンスキー」(『香川大学経済論叢』第78巻第2号2005年263-285頁)を参照されたい。

この町が疫病や災害などで没落するようなことがあれば、保険会社にどのような補償をしなければならないときには、「ハイネの『冬物語』をひもとくだけでいい」と結論づける。

さらに『著名なる騎士シュナップハーンスキーの生涯と行い』でハイネの叙事詩『ドイツ冬物語』が言及されている。この叙事詩はハイネの実体験に基づき、火災があったハンブルクに詩人が見舞いに赴くという設定でその旅程を描いているが、ドイツに到着して最初の町がアーヘンである。

「アーヘンの古い大聖堂には／カルロス・マグヌスが葬られている／……／／私は死にたくない、死んで皇帝として／アーヘンの大聖堂に葬られるよりも／むしろ一介の詩人として／ネッカー河畔のシュトゥッケルトに生きていたい。／／アーヘンでは路上に犬がノラクラしていて／ペコペコと哀願する／儂らを足蹴にしてくだせえ、見知らぬ方よ／そして少しは気が紛れるかも」(Caput III, WuB I/441)⁹⁾

叙事詩の語り手はアーヘンで皇帝よりも詩人として、死者としているよりも生者としてあることを願い、かと言って、卑屈な路上の犬になる気もサラサラない。続いて

「私はこの退屈な巣窟を／小一時間ばかり歩き回ったが／またしてもプロイセンの軍人に会ったが／すごく変わっていたと言うことは無い」(Caput III, WuB I/441)

アーヘンはすでにケルンと同様にプロイセンの支配下にあった。ハイネはプロイセン的なものと並び中世的なもの、封建的な匂いを嫌い、この叙事詩のテーマの一つが中世的なもの、封建的なものへの批判である。1840年代のドイツ・ナショナリズムに嫌悪感を抱き、その批判がこの叙事詩には充満しているが、それはこのような匂いを黒赤金¹⁰⁾のナショナリズムにも嗅ぎつけるからである。アーヘンの町で遭遇したプロイセンの兵士たちは中世的な匂いに満たされている。

「アーヘンのあの郵便局の看板に／またしてもあの大嫌いな鳥を／見かけた、そいつは毒々しく／私を見下ろしているのだ。」(Caput III, WuB I/441)

この「郵便局の看板」にある「鳥(=鷲)」¹¹⁾で『ドイツ冬物語』と『シュナップハーンスキー』が交錯する。ヴェールトが『ドイツ冬物語』を引き合

9) Heinrich Heine: *Werke und Briefe in zehn Bänden*. Hrsg. v. Hans Kaufmann. 3. Aufl. Aufbau-Verlag. Berlin und Weimar. 1980. Band 1. S. 441 以下『ドイツ冬物語』からの引用は(WuB I/441) のように出典を示す。

10) 「黒赤金」は言うまでも無く革命派のシンボルカラーである。

11) 「鷲 Adler」は「ドイツ帝国」の象徴である。

いに出したのはこの結節点による。ハイネはさらに

「醜悪な鳥め、お前を／いつか手中に入れて／お前の羽をむしり取り／
生爪を剥がしてやるぞ」(Caput III, WuB I/441)

と敵意を剥き出しにする。このような関連において抒情詩「皇帝カール」における封建的支配の象徴としてのカール大帝とアーヘンの関係およびそれに対する(ハイネともどもの)ヴェールトの見方もはっきりすると見て良いだろう。アーヘンという町の重要さがこの一連の箇所で見取れる。¹²⁾

*

次に注目すべき点はインゲルハイムでのことである。インゲルハイムはやはりカール大帝が居所とした町の一つでライン河畔にあり、この町には現在でもカール大帝当時の遺跡がある。¹³⁾ また、ドイツでは珍しい赤ワイン¹⁴⁾の産地としても知られている。この詩では「諸国民を打ち負かし」、血まみれになった手でカール大帝はブドウを植えるが、血の「赤さ」とそのブドウからできた赤ワインの「赤」とが見事に重ね合わされ、このインゲルハイムの町で「赤ワイン」ができる理由とされている。もちろんこのことは伝説に過ぎず、信憑性はない。だが、カール大帝の残虐さはその血とワインの赤さに見事に映し出されているのではないだろうか。さらにヴェールトのワインに関わる多くの抒情詩の中でも「ブドウの出来が良くなかった *Der Wein ist nicht geraten*」(『ケルン新聞 *Kölnische Zeitung*』1848年11月12日付け)と「ライン地方のブドウ栽培農民 *Die rheinischen Weinbauern*」¹⁵⁾は共通してブドウ

12) ハイネの『ドイツ冬物語』は1844年の成立なので、注5で述べたように「皇帝カール」がイングランド移住以前に成立したとすれば、直截な影響関係は考えられない。しかし、「皇帝カール」が印刷されたのが1848年6月という点を考慮すれば、もちろんヴェールトは『ドイツ冬物語』を読んでいるので(Vgl. 前掲 *Georg-Weerth-Chronik*. S. 52, 1845年1月)、無関係だったとは言えないだろう。

13) インゲルハイムとカール大帝との関わりについては前掲書(注7)の他に Dieter Krienke: *Ingelheim am Rhein. Rheinische Kunststätten*. Heft 516. 1. Aufl. 2010. および *Historischer Rundgang durch das Kaiserpfalzgebiet*. Hrsg. v. Stadt Ingelheim am Rhein — Forschungsstelle Kaiserpfalz. 3. Aufl. 2010.

14) 赤ワインは言うまでも無くキリスト教においてはパンとともにキリストを象徴する。Vgl. 「マタイによる福音書」26-27および「ルカによる福音書」など。さらに「ヨハネによる福音書」15-1ではキリストは「ブドウの木」と表現される。従って「皇帝カール」の第1連、3行目にある「キリスト教のため」に彼が行っていることこの詩を締めくくる「赤ワイン」ということばが響き合うのは至極当然のことである。

15) ワインはヴェールトにとって実生活でも詩作においても欠かせないアイテムである。特に初期においては夥しいワインをテーマとする抒情詩が遺されている。Vgl. 拙稿「ヴェールト『ライン地方のブドウ栽培農民』考」(『香川大学経済論叢』第83巻第3号

栽培農民たちの不幸と悲惨をテーマとしていて、他の詩とは趣を異にしている。このことは「皇帝カール」最終連に見られるカール大帝の残虐さと通底していると考えられよう。

*

同郷の先輩であり、『新ライン新聞』でも編集部でともに働いた詩人フライリヒラート Ferdinand Freiligrath (1810-1876)¹⁶⁾ は抒情詩「皇帝の恵み *Des Kaisers Segen*」(1843年)を彼の代表的な詩集『信仰告白 *Ein Glaubensbekenntniß*』(1844年)に載せている。この詩はカール大帝だけでなく、彼がライン河畔のワインとも関わりがあることも述べている点でヴェールトの「皇帝カール」と通底している。しかも注12に記したように推定されているイングランド移住以前にヴェールトの詩が成立したとしたら、両方の詩の近さが考えられ、詩人双方の資質の違いも容易に見て取れる。フライリヒラートの詩はカール大帝を敬意を持って描く。

「そしてエルベルの背後の畑で／私は彼に出会った／あの偉大なるカール、フランク人の英雄は／己のブドウに祝福を与える／／彼は真剣な顔つきで／死に装束を着て／輝きと光を浴びて／祝福のために甦ったのだ」¹⁷⁾

カール大帝はその力を持ってあらゆる人を力づける。もちろん彼は農民の困窮も承知している。

「彼は知っている、本物の飲み物は／残念ながら諸侯のみに／民衆は凍え、病気で横たわり／それを渴望せねばならない／中略／それも皇帝は気に掛ける／中略／皇帝は知っている、すべてのものに役立つことを／緑なす流れ全域で／心落ち着けて彼は休む／再びやって来るまでアーヘン大聖堂で」

2010年129-144頁)。なお、これは遺稿で、ブルーノ・カイザーは1845年成立と推定している (SW I/307)。

- 16) フェルディナント・フライヒラートの父親はヴェールトの父親の教え子であり、フライヒラートの名前フェルディナントはヴェールトの父親の名前にちなんでおり、住居も至近距離に構え、しかもヴェールトの長兄の幼友達であるなど、両方の詩人は非常に因縁深い関係にある。またこのフライリヒラートの詩とヴェールトのワイン関連の詩については Karl Hotz: *Georg Weerth — Ungleichzeitigkeit und Gleichzeitigkeit im literarischen Vormärz*. Literaturwissenschaft-Gesellschaftswissenschaft 22. Ernst Klett. Stuttgart. 1976. S. 84ff. を参照。
- 17) *Ein Glaubensbekenntniß. Zeitgedichte von Ferdinand Freiligrath*. Mainz. Zaubern Verlag. 1844. (Nachdruck 1994) S. 91ff. および *Freiligraths Werke in zwei Bänden*. Hrsg. v. Paul Zauernert. Meyer-Klassiker-Ausgaben. Leipzig u. Wien. o. J. Bd. 1. S. 287ff.

詩の「私」が見たのはカール大帝の幻影だが、それはハイネのそれとも、ヴェールトのそれとも異なっている。このような君主に対する見方が、ハイネは勿論だが、ヴェールトにおいてもハッキリとしている。このような比較においてもヴェールトの詩の特徴がよく分かる。

*

注1に記したように、1848年6月1日の『新ライン新聞』創刊と同時にヴェールトは物語集『ドイツ商業生活のユーモラスなスケッチ』の連載を同紙で再開し、翌日の第2号にこの物語集の続編と抒情詩「皇帝カール」をともに第一面最下段に併載する。『ドイツ商業生活のユーモラスなスケッチ』の新しい連載は「窮地のプライス氏」を以て始まるが、6月1日付けの紙面では、『ケルン新聞』での冒頭部分を踏まえ、その書き出しの前に「またしても wiederum」を加え、最初の段落は『ケルン新聞』連載時とそっくり同じで、商店主プライス氏の帳場の描写から始まる。以前と違ったのはすでに革命が起ってしまったことだが、そのために以前と比べ痩せこけてしまったプライス氏にとってこの「呪われた verflucht」革命は彼の商売をすっかり変えてしまい、規模を縮小して進めなければならなくなっている。そのために彼はすでに長年尽くして働いてくれた手代ザッサフラスにも暇を出して、さらに人員整理を進めようとし、次の解雇対象として片腕である簿記係レンツにその旨を告げようとした矢先に（連載第二回）、郵便配達が新聞を届ける。その新聞を読んだプライス氏はさらに驚愕し、手近の安楽椅子に沈み込む。そこに書かれてあったのはパリ、ウィーンに次いでベルリンでも革命が勃発したという衝撃的なニュースだった。ちなみに「皇帝カール」掲載の翌日号（Nr. 3）もこの章「窮地のプライス氏」が続くが、ここではプライス氏は深夜奇妙な夢を見る。商業に不可欠な帳簿の数字の世界でも「王様」であるゼロに対し他の数字が反乱を起こすのである。それ自体では実態を表さないが、大きな数を表すために必要なゼロが君主然とし、横柄な態度を取るのに対し、積もり積もった不満が他の数字を革命に駆り立てる。こんな夢を見たプライス氏が朝目が覚めて窓の外を見ると近隣の教会の塔に黒赤金の旗が翩翩とするとここでこの章は終わる。ここでの商業のあり方が微妙に「皇帝カール」の第4連2行目の「黄金や金銭が朕の何に役に立つ」と触れあっていると考えるのは考えすぎだろうか。

*

最後に本稿のきっかけの一つにもなったメーリング Franz Mehring (1846-1919) とのことに触れねばなるまい。ドイツ社会民主党 (SPD) の機関紙『新時代 *Neue Zeit*』(Nr. 26, 1907/08) I, 684 に載せたメーリングの短い文章「ゲオルク・ヴェールト『皇帝カール』 "*Kaiser Karl*" von Georg Weerth」¹⁸⁾ によるが、彼は当時発表上演された劇作家ハプトマン Gerhart Hauptmann (1862-1946) の戯曲「皇帝カールの人質 *Kaiser Karls Geisel*」(1908年)¹⁹⁾ が「とっくの昔に忘れられたゲオルク・ヴェールトの詩を思い出させ」た。彼はさらにヴェールトの詩は「とっくの昔に集められるべきであった」と述べ、彼の意見ではそれだけに「なおさら掲載したい」との考えから、件の抒情詩「皇帝カール」が続けられる。

ヴェールトの作品は、詩人本人が『詩集』(注3参照)と「旅行記」も刊行することを考えたり、準備していたにもかかわらず²⁰⁾、結局生前単行本の形で出版されたのは『著名なる騎士シュナップハーンスキーの生涯と行い』だけである(注8参照)。後は関係した新聞雑誌に寄せたものと原稿のまま遺されたものがあるだけで、よく知られたエンゲルスの評価²¹⁾にもかかわらず、ドイツの労働者階級によく知られた存在だったとは言いがたい。しかし、「皇帝カール」は『新ライン新聞』に掲載されたが故に、人の目に触れる機会があった。再掲されることも可能になった。このことはどちらかと言えばまれなことだったと言わざるを得ないし、ヴェールトが本格的に復活するのは第二次世界大戦後の詩人の没後百年を記念して刊行されたカイザー版

- 18) メーリングはここに言及した小文「ゲオルク・ヴェールト『皇帝カール』」の他に二つの小文でヴェールトに言及している。Vgl. 拙稿「メーリングの『ヴェールト』論」(『香川大学経済論叢』第83巻第1・2号2010年111-122頁) および Franz Mehring: *Gesammelte Schriften*. Hrsg. v. Thomas Höhle, Hans Koch, Josef Schleifstein. Band 10. *Aufsätze zur deutschen Literatur von Klopstock bis Weerth*. Dietz Verlag. Berlin. 1977.
- 19) ブルーノ・カイザーによる注釈も参照 (SW I/307)。ハプトマンの「皇帝カールの人質」は彼の作品の中では取り上げられることは多くないが、カール大帝のキリスト教布教にまつわる内容で、この劇では彼の「人質」であるザクセン人のゲルスaintが頑強に改宗に抵抗して最後は死を選ぶ。
- 20) ヴェールトは革命後商社の営業担当という「本業」に専念し、ヨーロッパ各地のみならず中南米までを行動範囲としたが、その旅先から母親宛に送った書簡の一部には番号が付けられ、いずれ本としてまとめることを考えていたと考えられている。Vgl. 拙稿「ヴェールトの中南米旅行」(宮崎揚弘編『ヨーロッパ世界と旅 続』法政大学出版局所収) 2001年。
- 21) エンゲルス Friedrich Engels (1820-1895) はヴェールトのイングランド時代からの盟友であり、晩年早逝した友人を偲ぶ文章を書き、ヴェールトのことを「ドイツ・プロレタリアートの最初にして最も重要な詩人」であると最大の賛辞を送っている。Vgl. 拙稿「ヴェールト『遍歴職人の歌』考」(『香川大学経済論叢』第82巻第4号2010年303-319頁)。

全集を待たなければならなかった分だけ、この詩が『新時代』詩に再掲されたのは特筆すべきことである。そしてこのことがあったのはドイツの「第二帝政」時代、第一次世界大戦前夜である。マーリングはドイツ皇帝ヴィルヘルム二世と重ね合わせたのだろうか。